



命を救う情報に 格差があってはならない

CS放送『目で聴くテレビ』ディレクター

映像作家 **今村 彩子**さん



私は、ろう・難聴者のためのCS放送『目で聴くテレビ』のディレクターを務めています。『目で聴くテレビ』は95年の阪神淡路大震災をきっかけにスタートしました。

地震が起きたとき、ろう者は何が起きたのかテレビやラジオから情報を把握できません。それを解決するために手話と字幕で情報を伝えています。

*

東日本大震災では、東北のろう・難聴者の様子を伝えるために3月と4月に福島、宮城、岩手、秋田を回りました。宮城県岩沼市の避難所にいるろう高齢夫婦は「地震直後、近所の聴者から避難するように言われてすぐ避難した。その後、津波がきて家が流された」と話していました。もし教えてもらわなかったら、津波にのまれ、死んでいたとのこと。津波の音が聞こえないのは怖いと感じました。避難所でも情報が得られず、ストレスがたまって

いるとのこと。これは災害だけでなく、日常生活でも情報が得られない社会がもたらした二次被害です。

取材中、私もこの二次被害に遭いました。4月12日に福島県いわき市の海岸の近くで地元のろう者と福島県聴覚障害者協会の会長さんにお話を伺っている途中に震度6弱の地震に遭いました。地震がおさまり、会長が「3月11日はこれよりももっとすごかった」と興奮状態で話していると、聴者スタッフが叫びました。「サイレンが鳴っている!」「津波がくるかもしれない! 遠くへ避難しないと!」。慌てて車に飛び乗り、海岸から離れました。警報が聞こえず、そのまま話していたら、津波にのまれていたかも…と思うと恐ろしくなりました。

これは一刻も早く解決しなくてはいけない問題だ。津波警報も携帯メールで知らせるなどしないと、ろう者は情報がつかめません。命を救う情報に格

差があってはなりません。

その晩は不安が大きく、消灯すると、「だいじょうぶかな。生きて帰ることができるのだろうか」と考えが悪い方へ悪い方へ。夜は暗いため周りが見にくくなります。停電になったら盲ろう状態になり、安全を守る情報から遮断されます。私もかなり不安になり、体は疲れていても頭がさえてなかなか寝つけませんでした。

翌朝、窓を開けると青空が広がっていてホッとしました。夜は毎日くる。闇は不安な気持ちを大きくさせる。東北のろう者は不安な気持ちを抱えながら暮らしている。その気持ちを癒し、ストレスをためないようにする心のケアが必要だと痛感しました。

災害や日常生活で、ろう者が情報を得られない社会から情報を得られる社会にしていくために、東北のろう・難聴者に寄り添って取材をして復興の様子を伝えていきます。



いまむら あやこ 1979年、愛知県生まれ。愛知県立豊橋高等学校、愛知教育大学教育学部を卒業後、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校に留学。映画学科・アメリカ手話・アメリカろう文化を学ぶ。現在、名古屋学院大学と愛知学院大学で講師を務める一方、さまざまな立場の人が自分らしく輝くことのできる社会をつくっていくこと、ろう者を取り上げたドキュメンタリー映画を制作。自主上映や講演活動も行う。

左の写真は被災地での取材の様子。このときの映像は、ドキュメンタリー『架け橋〜東日本大震災 一か月後の被災ろう者〜』としてまとめられている。

公式HP <http://studioaya.com/>